

# みのまわり

②

私が初めて浴衣を誂えてもらったのはたしか高校生のときで、とても嬉しかったのを覚えている。

大学生になって、なぜか着物に魅かれ、古着物屋さんで購入。その店長さんの着物姿が粹で、着物にますます興味が湧いた。

学生時代、着物と少しだけ触れ合った私は今、月1回以上は着物を着て出かける。

もちろん、着物だと自転車に乗れない(最近は着物用の自転車があるみたいだが)ので、着物の時は、必ず歩くことになる。

そうすると、ゆっくり町を眺める時間があるのずとできる。

公園で遊ぶ子どもたち、玄関先を掃除する人、タバコを吸う人、ご近所さんのお話。歩くことで、その土地の暮らしが必然的に見えてくる。

さらに、こちらは着物だから少し目立つのか、ちらっと見られることも多々ある。

そんな時の私は、なんだかぴりっとしたり、笑顔でこたえてみたり。



いつもなら急いで帰る道のりも、着物を着ているとゆっくりとした時を過ごし、風、音、匂い、光、様々なものを身体で感じる。

こんな時の流れを、果たしてどれだけの人が感じているだろうか？

時は、全ての人に平等に与えられている。

その一瞬一瞬をどう過ごすのか、それは自分次第である。

自分にぴったりに誂えた着物、母からもらった着物、血縁関係のない人からの着物、購入した古着物、もう亡くなった方の着物。

受け継いだ着物を着て、その人が見ていない世界を、今を、歩く。

さて、あなたが今見ている景色はどんな景色ですか？

早すぎて鮮明に見えない・・・  
そんなことはないですか？

ゆっくりと時を刻む。

その一つの方法として、着物はあるのかもしれない。

二〇一四年一月 やまさきさちよ